

---

# 大切なもの

翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大切なもの

### 【Nコード】

N0141M

### 【作者名】

翠

### 【あらすじ】

【新×蘭×快斗】四名画事件で高木刑事がキッドだと気づいた蘭は……？

サイトに掲載している「02・秘めごと」(コナンファンに謎の100のお題より)「の蘭サイドのお話です。

「おかしい……」

「どうしたの？ 蘭ねーちゃん」

コナンの声で、自分が思っていたことを口に出してしまっていたことに、蘭は気がついた。

蘭はコナンに気づかれないように、そつと深呼吸をして気持ちを落ち着けると、につこりと微笑んだ。

「ううん。なんでもないのよ。キッドは宝石ばかり狙っていたのに、どうして絵を盗んだんだろう、おかしいなぁと思っただけよ。それに今回は殺人まで起こってしまったし……」

蘭は目の前で行われている、及川の記者会見に目をやった。

「うん、そうだね。……絵が盗まれたことはともかく、殺人はキッドじゃないと思うよ」

その言葉に蘭が振り向くと、コナンは何もかもお見通しというような不敵な笑みを浮かべた。

「あら、どうしてそう思うの？ 中森警部もそう言っていたけど」

「中森警部と同じ理由だよ。アイツは人の命は取らない。……救うことはあっても。そうでしょう？ 蘭ねーちゃん」

につこりと子供らしい無邪気な笑顔の向こうに、何もかも見透かしているかのような視線を感じた。そしてそれが新一のものであるかのような錯覚が蘭を襲い、また、新一に言えないでいる秘密を知られているような気がして、蘭は知らず自分を抱きしめていた。

「寒いの？ 蘭ねーちゃん大丈夫？」

心配そうにのぞきこむコナンの声に蘭はハッと我に返った。

「あ、ううん。大丈夫よ、ありがとう」

コナンの安心したような顔を見て、蘭はじんわりと暖かいもので心が満たされていくのを感じた。

（なぜだろう、コナン君が笑っていると安心する……しぐさや口調のひとつひとつが新一に似ているからかな……）

「だから私は怪盗キッドにお願いしたい！ 今夜君が奪った「青嵐」と義父の命を……返してくれとね！！」

及川の興奮して上ずった大声がした。

蘭はその言葉を聞いて、無意識に服の上から携帯を握り締めた。

「帰るぞ！」

小五郎の声で、事件のことに心を奪われていた蘭は現実を引き戻され、あわててコナンの手を取ろうとしたが、コナンはいなくなっていた。

「え、あ、でも……コナン君が……さっきまでいたのに……」

「またかよ？ あのガキ……」

（ダメダメ、蘭。邪魔しちゃうかもしれないんだから……。それより、今はコナン君。きつと事件のことを調べて回っているんだわ！ ホント、新一そっくりなんだから……）

蘭は携帯を握り締めていた手を離し頭を振ると、コナンを探すべく走り出した。

「でも、おかしくありませんか？ この別荘を機動隊が包囲していたのに、誰も逃げる所を見てないなんて……」

蘭がコナンを連れて戻ると、高木達が事件について話し合っていた。

高木の発言にコナンが同調し、それを受けて高木が我意を得たりとばかりにコナンに話をする。

蘭は、緊張で乾いた唇をぎゅっと噛み締め、高木の様子を注意深く見ながら口を開いた。

「のせないでくれますか？ この子もう寝るんですから……」

「あ、はい……」

高木は蘭に、申し訳ないというような引きつった顔を見せてから、目暮に向き直りさらに事件について話し始めた。

その様子を蘭は瞳をそらすことなくじっと見詰めていた。

高木の言葉が皆の関心を集める、高木の手が生み出す簡単なマジックが皆を真実に導く……。

蘭の、もの問うたげな視線に気がついたのか、高木の瞳が蘭を捉え、二人の視線が交差する。その瞬間、高木は先ほどまで手にしていたガラスのコップを落とした。

佐藤に注意され、あたふたとしながらコップを片付ける高木はい

つも通りだ。二人のかもしれない雰囲気もいつも通り。

けれど、違う。

蘭はずっとひっかかっていた違和感の正体に気がついた。

（キッド……）

蘭はハツとしてコナンの様子を盗み見ると、コナンは高木達の様子を鋭い視線で見つめていた。

（私が気がついたのだから、コナン君も気づいたかもしれない……）

蘭は、コナンとは違うアプローチで真実にたどり着いたとは思ってもせず、高木からコナンを離れた方が賢明とばかり、小さな名探偵を連れて帰ろうとしたが、既に彼の姿は消えていた。

事件について調べているのだと、危ないことには首を突っ込まないように注意しているのにも思ったが、とりあえず今すぐキッドの正体がわかってしまうこともないと、蘭はコナンを心配する反面、安心もしていた。

蘭は複雑な胸の内を自嘲気味に振り返り、その一因である高木を一瞥してから、コナンを探すためその場を離れた。

コナンを連れて戻るとすぐに小五郎が推理ショウを始め、何もかも及川が仕組んだことだとわかった。

蘭は、キッドの疑いが晴れたことにホッと胸をなでおろし、思わず高木を目で追う。すると、そっと現場から離れて行く高木と、そ

の後を追うコナンの姿が目に入った。

（やっぱりコナン君は気づいてる！）

蘭は慌てて二人を追おうとしたが、小五郎がいま目が覚めたばかりに大きなあくびと伸びをして蘭の行く手を遮った。

自分で犯人は及川さんだと言っておいて、犯人が及川さんだということに驚いている小五郎を引きずってコナンを探す。

どこかで、コナンがキツドの正体を暴いているのではないかとと思うと、蘭は気が気ではなかった。

元刑事であり、名探偵と誉れ高い毛利小五郎の娘であるにもかかわらず、『平成のルパン』とも『月下の奇術師』とも評されているいわゆる『泥棒』である彼のことが、である。

「新一も、きつとコナン君みたいに、『キツドを捕まえてやる！』って瞳をキラキラさせながら言うんだろうな……」

蘭は、今どこにいるのかわからない幼なじみのことを思い出し、ふつと口元を緩めた。

そう。似ているのだ。

姿かたちは言うまでもなく、内面が。

蘭はうまく言い表すことが出来なideいた。

彼らの外見は確かに似ている。それは、何度か新一に変装したキツドと共にいて気付くことが出来なかったことからもうかがい知れる。その時のキツドは多少髪型はいじっていたが、素顔で目の前に現れていたのだから。

だが、キッドことを知るにつれ、その性格の違いに『全然似ていない』という印象を持つようになる。

性格はまったく違う。

けれど、似ている……。

それが、蘭を混乱させているのかもしれない。

大好きな幼なじみを応援する気持ち。

大切な友人を応援する気持ち。

どちらも確かに蘭の中にあり、どちらも大切なものだから。

守りたい。

「コナン君？」

蘭は、コナンの声がもれてきた扉に手を伸ばし中をのぞこうとしたが、一瞬早く小五郎が扉を開いた。と同時に、何かが小五郎のベルトに命中し、ズボンをずらす。それに気を取られている間に煙幕が広がり、爆発音と共にキッドが窓から飛び立っていった。

「か、怪盗キッド!？」

思わず窓から身を乗り出して彼の安全を確認する。  
と、階下からかすかに物音がした。



（もしかして下にいる！？）

蘭はとっさにいぶかしんでいるコナンの気をそらすため、そしてキッドに聞かせるため、大声を出した。

「行こ！ 早くこの事を警察に知らせなきゃ！」

「う、うん……」

目暮達の元へ向かう間、コナンの手をぎゅっと握り、蘭は心の中でごめんねと謝った。

そして、目暮やコナン達が話し込んでいる輪からそっと抜け出すと、携帯を取り出し、アドレス帳にある彼の名前を選択した。

（後書き）

サイトに掲載している「02・秘めごと」コナンファンに謎の100のお題より「の蘭サイドのお話です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0141m/>

---

大切なもの

2010年10月10日01時06分発行